昭和の大横綱

大鵬　幸喜

一九六一年、横綱まで登りつめ、日本中に絶大な人気を誇った力士がいました。その名は、大鵬幸喜。弟子屈町出身の力士です。

〔大鵬記念館蔵〕

一九五六年、十六歳で相撲部屋に入門した幸喜は、全国から集められた新弟子六十数名の中で、次第に人並み外れた強さを発揮するようになります。幸喜の素質と強い気持ちに目を付けた親方は、稽古に打ち込む姿をいつもじっと見守っていました。

「一日に四股を五百回、*鉄砲を二千回、それがお前の日課だ。」他の弟子たちが稽古を終えても、幸喜の稽古はまだ終わりません。なんで俺だけがと思うこともありました。しかし、それは、将来、大成すると見込んだ師匠の期待の表れでした。

幸喜は体格にめぐまれていましたが、決して天才肌ではありませんでした。厳しい稽古を乗りこえる幸喜の一番の武器は素直さでした。「ハァ、ハァ…なんてきついんだ。だけど、おれには相撲しかない。」「決められた以上のことを出来るまでやる。」幸喜はだれよりも早く起き、だれよりも遅くまで稽古に打ち込みました。毎日稽古をつける兄弟子も、何度も立ち上がって向かってくる幸喜が、少しずつ力を付けていることに気付いていました。

初土俵を好成績でスタートした幸喜は、その後、全勝優勝をかざり幕下に進みます。

一年後の十七歳の夏、幸喜は久しぶりに北海道をおとずれます。そこで待っていたのは大きな横断幕とたくさんの声援でした。

「お前さんは弟子屈の英雄だ！」

「未来の大横綱、がんばれよ！」

その様子に、幸喜の母親も心の底から喜んでくれました。

「みんな…ありがとう。」支えてくれる大勢の人たちがいることに気付いた幸喜は、土俵へかけた人生の重みを改めて感じました。

ある日、幸喜より二歳年上で、すでに大活躍中の力士、柏戸が、稽古場を訪れ、幸喜に稽古を申し入れました。

「一番、お相手していただけるかな。」

「は、はい！」

幸喜は、柏戸の速攻に吹っ飛ばされ、全く相撲になりませんでした。

「…これが本物の相撲だ。」

幸喜は、にぎりしめた拳にぐっと力をこめたのでした。

一九六一年、幸喜は第四十八代横綱「大鵬」となりました。横綱に昇進した場所の千秋楽、大鵬はついに柏戸を破って優勝しました。

引退後、大鵬はその当時をふり返り、こう語ります。

「横綱時代、天才と言われるのが非常に嫌いでした。私が自信をもって言えること、それは、人の何倍も自分が納得するまで、徹底して稽古したということだけなのです。」

大鵬の強さと生き方は多くの人々に勇気と感動を与え、今も「昭和の大横綱」として、語り継がれています。

［大鵬企画蔵］

一九四〇	南樺太（現ロシア領サハリン）で生まれる
一九五一	弟子屈町川湯に転居する（十一歳）
一九五六	川湯中学校を卒業する
	弟子屈高校（定時制）に入学する
	七月　二所ノ関部屋に入門する（十六歳）
	九月　初土俵を踏む
一九五八	三段目で全勝優勝する（十七歳）
一九五九	十両に昇進、「大鵬」を命名される（十八歳）
一九六一	横綱に昇進する（二十一歳）
一九七一	引退する（三十一歳）
	【記録】三十二回優勝　二度の六連覇
	八回の全勝優勝　四十五連勝
二〇一三	東京で死去する（七十二歳）
	「国民栄誉賞」が授与される

＊四股…両足を開いて構え、足を左右交互に高く上げる、相撲の基本動作の一つ

＊鉄砲…相撲で柱に手を打ち付けてする稽古のこと